巻頭言

巡礼

平石　知良

四国八十八ヶ所。白衣にすげの笠・どこかに同行二人の文字・金鋼杖。墨染めの衣・饅頭笠・僧侶の一団。野辺の道を行く、巡礼の人々。

四万十川河畔で生まれ育った私たちの生活のそばを、巡礼たちは通り過ぎていった。しかし、白衣でも墨染めの衣でもなかった。衣装は、年年歳歳変わっていった。

宗教や信仰を持たない民族は、存在しなかった。民族といえば血縁を中心に考えがちなのだが、その結束力の基は宗教や信仰であると、表現したほうがうまく説明がつく。民族とよぶよりも、宗族とよぶのがいいかもしれない。

お正月に神社へ初詣に行って、結婚式を教会で挙げて、死ねばお寺様のお世話になる、という私たちは宗教も信仰も持たない無神論者だと自ら決め付けるのには、問題がある。

信仰に戒律は必要なのだが、戒律の厳しい信仰もあれば、いたって緩やかな信仰もある。こうなるには、こうなる理由がある。

私たちは、何かを求めて信仰に依る。

その求めは、時とともに変化し続けた。

伝染病が発生すれば、羅らぬように祈ったし、水不足になれば「雨を降らしてくださいと」祈った。

現代では鳥インフルエンザがはやっていれば、病院で予防注射を受けるだろうし、水がほしければ、井戸を抜いたり湖沼の水を目的地へ輸送する手段を探すだろう。

「水神様」も「はやり病の神様」も出番が少なくなる。まったく出番が無くなれば、その神様たちは忘れられる。

古来、神様は祈りの場に降臨するものである、巨石や巨木あるいは聖なる山の頂に、降臨を仰いだのである。

生活の場の移動、生活の様式の変化は、神様への要求の変化でもあるし、離れすぎた祈りの場を生活の場の近くへ移動させる要因になっただろう。

移された新たな祈りの場所がここでなければならないのか、何故にこの神様が居てあの神様が居ないのかを理解することは、移動せねばならなかった理由を理解するものでもある。

祈りの場所を移さねばならない理由がもう一つ考えられる。為政者が、宗教の変更を求めたとき。歴史上その変更は何度もあっただろう。

古代神話「出雲の国譲り」も「大化の改新」も、為政者による宗教の変更と受け止める事ができるだろう。あるいは、明治時代の「廃仏毀釈」も加えなければならないだろうか。

日本では、征服した民族の宗教を徹底的に破戒して、信仰の根拠を奪い新しい為政者の宗教と信仰を刷り込んでいく、というスペインが南アメリカで行った「啓蒙」という方法はとらなかった。以前の宗教と信仰と新しい宗教と信仰を、攪拌していったのだった。

「神様の姿であったり、仏様の姿であったり、おなじものなのだ」と。

壮大な盤座の中に立つ寺院を、訪れたことがあるだろう、禅寺の枯山水の庭は盤座そのものではないか、ここは神社ではないのか、と何度つぶやいた事か。

破壊や絶滅という方法を選ばず、攪拌というか重ね着のようなとい

うか、共存というには先行していたものに厳しい、強制ではないが統制はする方法を選んだ。緩やかな戒律でなければならなかったのだ。

結果、祈りの場所には、古代より現代までの人々の想いが重層し、時間の重さで圧縮されて残されている。場所を移したり、形を少しずつ変えたりしながら、時々の要求を残している。

その変遷をたどれば、古代へたどりつける。

しかし、たどり着いた場所は、それぞれが遠くはないが同じ場所ではない筈だ。

それは、たどりゆく道の分かれ道で、私たちは知らず知らずに、自身の都合のいいほうを選んでしまうからだ。誰も、時代の子その束縛から逃れられない。だから他人の意見という、異なった視点を必要とする。

重積し圧縮されたそれは、巨大なものだと感じる。今知りえているのは、そのごく一部なのだと。

終戦の翌年、私の故郷は南海地震で壊滅した。その年に生まれた私が、「お遍路さん」を意識しだしたのは、それから五年後あたりからだろうか。

あの時代、誰もが粗末な衣服だったし空腹だった。

「着ているから衣服で、脱げばボロ」だった。その私たちよりもひどい衣服で、伸びほうだいの手入れのされていない、髪の毛と鬚、体臭もひどい彼らを「お遍路さん」とは呼ばずに「へんど」と蔑んだ。その彼らが托鉢に、家の前に立つのだった。空腹であった私たちは、一握りの米をその鉢の中に入れたり、釜の中の飯を握って漬物の切れっ端ともに、手渡したりしていた。

ある時期から、「へんど」を見かけなくなり、「お遍路さん」が増えていった。

関心の中から、「へんど」が消えた。

縄文文明と現代文明との分水嶺の一つが、生と死の距離感である。始まりのあるものは、いつか終わるし、生まれたものは、いつか死ぬのだ、という現実からの距離感。牛肉を食べるには、飼育する人がいて、殺し解体する人がいて、たべない部位を処分しなければならない。

大豆は大豆として転がっていない、根も葉も鞘もある生き物の一部であれば、不要なものの行く先に無関心ではいけない。

「へんど」が何を求めてここに来たのか、が解かった、「死ぬ為に」ここに来たのか、と。

時代は、明るく豊かになっていった。

輝くものに集まり、影を遠ざけよう遠ざけようとしているかに見えた。

白衣と墨染めの衣の現代の巡礼たちは、冷暖房の調整された観光バスやタクシーの座席をうめていた。

現代には現代の巡礼の方法があっていい、故実のとおりに巡礼を行うこともいい事だろう。

「歴史に何を求めるか」と尋ねれば、十人十色の答えが返ってくるだろう、それと同じ事なのだ。

盤座のフィールドワークに山中を彷徨っているとき、遍路道でないかと思われる径に出会う。

その径の側に、膝ほどの高さの石を置いたり、頭ほどの石を数個積んだ場所がある。

「へんど」は、ここに眠るのか。薄汚れた巡礼の目的の地、ここだったのかと。

同じような石積が古い墓地の片隅にあって、「へんど」の墓と言い伝えられてきた事からの類推なのだが。

生まれたものは、生きなければならないし、そして、死ななければならない。

祈りの場には、生きる事への祈りとともに死ぬ事への祈りも積み重なっているだろう。

死を遠ざけようとする時代の時間よりも、死を重要な行為とする時代の時間は長く、

祈りの場に確かな位置をしめているだろう。

了